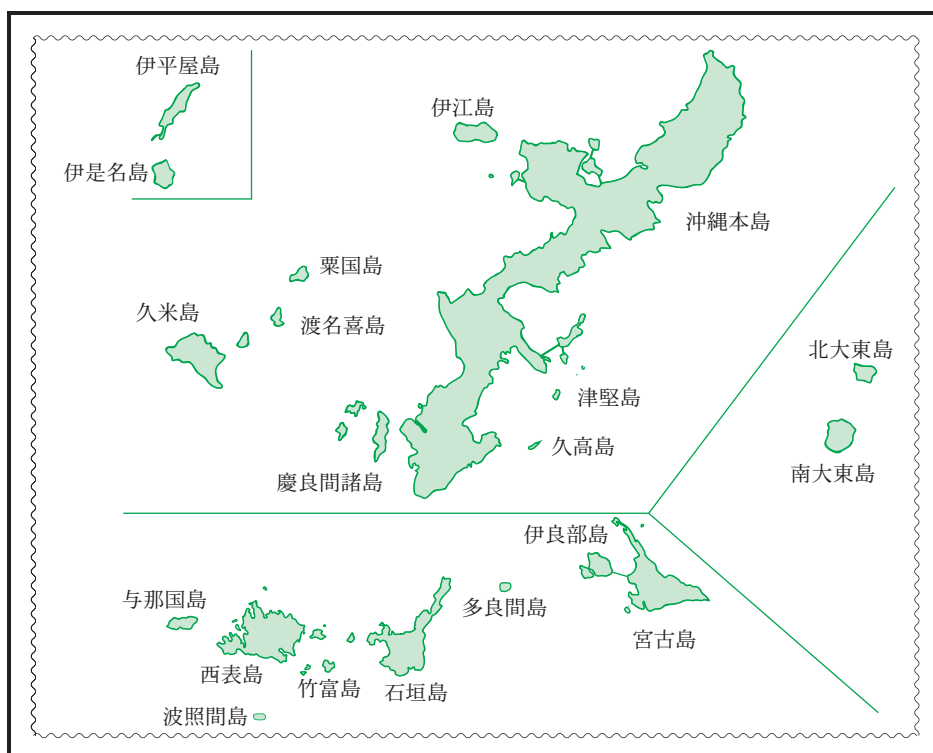




沖縄県小学校長会 沖縄県中学校長会

第 88 号

会 報



も く じ

1. 県校長会会長に就任して

「学校のウェルビーイング」を目指すチーム校長会
那覇市立城南小学校 校長 田 島 正 敏 …… 1

2. 新任校長としての抱負

- (1) 授業改善・学校改善（赴任後取り組んだ学校組織
マネジメント）～キーワード「つながり」～
浦添市立牧港小学校 校長 吉 田 朝 顕 …… 2
- (2) 学校の特色を強みとした魅力ある学校づくり
～学校グランドデザインの活用による共通理解を通して～
座間味村立慶留間中学校 校長 大 田 恵 …… 4

3. 特色ある学校づくり

- (1) 地域と共に未来を育む教育の推進
宮古島市立砂川小学校 校長 砂 川 栄 作 …… 6
- (2) 海洋教育を主軸としたダイナミックな教育活動
竹富町立竹富小中学校 校長 岡 崎 心 一 …… 8

4. 校長講話

- (1) 共有し「対話する」校長講話「子どもに力をつける」ために
東村立有銘小学校 校長 前 川 恒 久 …… 10
- (2) 創立三十周年 地域から応援される学校をめざして
Move 沖縄東中
沖縄市立沖縄東中学校 校長 宮 城 秀 輝 …… 12

5. 在外日本人学校便り

財務感覚を持ち、日本国の各機関、上海日本商工
クラブと密接に連携
上海日本人学校虹橋校 校長 當 間 朝 成 …… 14

県校長会会長に就任して



「学校のウェルビーイング」を目指す チーム校長会

沖縄県小学校長会 会長
那覇市立城南小学校 校長 田島 正敏

一 はじめに

昨年度に引き続き、沖縄県小学校長会会長を務めさせていただいております、田島正敏でございます。昨年度は、全国連合小学校長会の常任理事として国政の現場に直接関わる貴重な機会に恵まれました。さらに、近年は次期学習指導要領改訂の検討が着実に進み、国の教育情勢や沖縄県独自の教育施策にも大きな変革の兆しが見えつつあります。こうした背景の下、本年度は県小・中学校長会の代表会長として、本県教育のさらなる充実・質の向上に全力で邁進してまいりたいと存じます。皆様におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

二 「チーム校長会」としての役割

急激な社会変革とデジタル技術の進展、さらには少子高齢化・人口減少といった現代の課題の中で、学校教育における「学びの保証」と「児童生徒のウェルビーイング」の向上は一層喫緊の課題となっており、最新の改訂検討により、個々の可能性を最大限に引き出す『令和の日本型学校教育』の実現が求められる今、次期学習指導要領改訂に向けた議論は「論点整理」の段階にあります。主體的な学びへの取り組みや、デジタル学習環境の活用など、現場で浮上する課題に対して、私

ち校長はその動向をしっかりと注視し、各校で実効性のある対応策を共有・検討する必要があります。会則に掲げる「沖縄県小中学校教育の振興を期するため、学校経営の諸問題について、その解決を図る」という理念のもと、私たち「チーム校長会」は、これらの多様な課題に全力を傾け、未来を見据えた教育の基盤づくりに努めてまいります。

三 魅力ある学校運営の推進と働き方改革

学校経営の現場では、我々校長が、関連法令や学習指導要領の精神を踏まえた上で、自らの教育理念と明確なビジョンに基づいたリーダーシップを発揮することが求められます。また、保護者や地域社会との連携を深化させ、信頼される学校運営を実現することが急務です。令和七年度の学校経営指針では、「魅力ある学校づくり」と「生きる力を育む教育課程の編成・実施・評価・改善」が基本柱として示され、すべての教職員が専門職としての誇りをもって日々研鑽することが期待されており、カリキュラム・マネジメントを通じ、個別最適な学びと協働的な学びの両立を図ること、で、「自立した学習者」の育成に一層力を注いでまいります。

さらに、働き方改革においては、『私たちのピース・リスト2023』に示された「働きやすさ」「働き

がい」「心身の健康」という三軸・六視点の実感向上が、教職員の安心と生産性に直結する重要な指標となっており、〇〇をはじめとする教育〇〇の推進や、業務の適正な役割分担を通じた環境整備により、教員がその能力を思う存分発揮できる基盤を築いていくことが、魅力ある学校運営と地域全体の教育発展に寄与すると確信しております。

四 各種の研究大会

本年度は、十一月六日・七日に「第六十六回沖縄県小・中学校長研究大会那覇大会」を開催いたします。本大会では、県教育振興基本計画や最新の県施策と連動した研究テーマを設定し、現場の課題解決に役立つ充実した議論が展開される見込みです。

また、令和九年八月開催予定の「全九州地区中学校長協議会研究大会沖縄大会」へ向けた基盤整備の年度でもあります。これらの大会では、全会員の皆様の貴重なご意見を反映し、活動方針や学校経営指針に基づく実践的な取り組みを推進するとともに、県内外の情報交換を通じ、沖縄県教育のさらなる発展に貢献していく所存です。

五 結びに

本会が発足して以来、先輩方の多大なご尽力と確固たる業績に、心から敬意を表するとともに、その教えを礎として、今後も教育革新の歩を進めていく決意でございます。未来を担う児童生徒がそれぞれの個性と可能性を存分に発現でき、また教職員が誇りとやりがいをもって働ける「学校のウェルビーイング」を実現することこそ、我々の共通の目標です。今後も皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げるとともに、共に笑顔と情熱あふれる学校経営を楽しみ、教育の未来を切り拓いていきたいと思います。

新任校長としての抱負



授業改善・学校改善（赴任後 取り組んだ学校組織マネジメント） キーワード「つながり」

浦添市立牧港小学校 校長 吉田 朝 顕

一 はじめに

原稿執筆依頼を有難く受けたため、抱負を文字として記すのみではなく、赴任後、現場で実践として取り組んでいることを記し、それを抱負に替えたいと思う。ここに記している内容は、赴任後の四月・五月に取組んだ内容となっている。

二 コロナ禍を経た学校

十年前前、四十代中ごろに、大学院修学休業制度を活用し、兵庫教育大学大学院学校経営コースにて二か年間、学校管理職としての資質・能力の向上を図るべく、学校経営の理論を学ぶ機会を得ることができた。その知見を基に、学校長として赴任した現場を俯瞰して見たとき、改めて学校組織マネジメントの必要性を感じ、その研修から取り組んだ。

コロナ禍を経て、学校現場は揺らいでいる。PTA組織の衰退、地域との関係希薄化、学校組織としての弱体化、職員同士の関係希薄化等、人々が「つながる」時や場所が制限されていたコロナ禍。コロナ禍を経た今でも、当時のように人々が「つながる」時や場所を意図的・計画的に醸成せず、もはや放置されている現状が散見される。

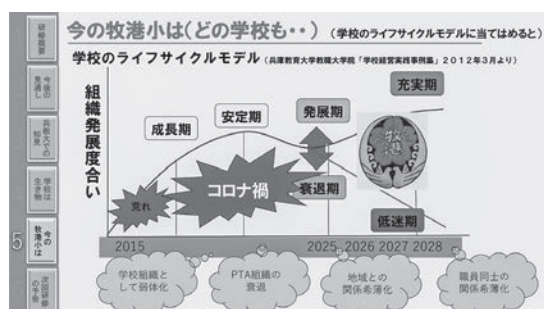


図1 学校のライフサイクルモデル

① 学校組織マネジメント研修
「学校は生き物」と言われる。学校は単なる建物や制度ではなく、絶えず変化し、成長し、関係性の中で動いている存在である（図1）。特にコロナ後の学校は、学校を取り巻く外部環境や内部環境で様々な変化があり、そのあらゆる変化に対して、学校がどのように対応するかが問われている。具体的な外部環境では、地域との関わりであつた

その結果どうなるのか。子供たちを取り巻く教育環境の質が下がるだけである。「つながり格差は、学力格差」「つながり・・・」等の書籍に目を通すとそれは明らかなこと。と同時に、教育経営学会・学校改善学会等の論文にも示されている。

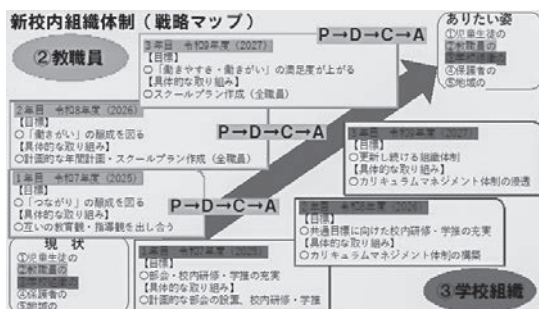


図2 戦略マップ 現状からありたい姿へ

「学校は生き物」という言葉に関して二年前に大学院で学習した学校マネジメントの授業を思い出すことができた。（なんとなくですが）とてもわかりやすく、且つ、牧港小学校がどこに向かっているのか。牧港小学校が発展・充実するための私自身が何ができるのか色々考えるきっかけとなりました。子供たちに身につけさせたい力やそのためのエビデンスなど学級の子どもたちの成長のためにそこをしっかりと明確化・視覚化する必要性もあると感じました。

り、内部環境では、PTA組織や学校の組織体制等である。あらゆる関係性の中で、学校が組織として、職員同士が教育観や指導観を意図的・計画的に出し合う場を設けることで、同僚性を醸成させることにつながる。そのため、赴任した四月末に学校組織マネジメント研修と銘打って牧港小学校の教職員・学校組織のありたい姿に向けての見通しを示した（図2）。さらに、学校には成長期・安定期・発展期又は、衰退期等という生き物としてのライフサイクルがあると言われている。そのため、常に勤務している学校現場の児童生徒の実態を丁寧に把握し、その実態に応じたカリキュラム編成をしたり、組織編制することの必要性を学校組織マネジメント研修で確認した。研修後の職員の振り返り（図3）には、組織として、チームとして取り組むうえでのエビデンス分析の重要性、それを基にした組織・教職員・子供たち等の目指す姿の共有の価値を捉える振り返りが多く見られた。

図3 研修後の振り返り



図4 スクールプラン

② ツールとしてのスクールプラン
 スクールプラン(図4)に示されている「育成を目指す資質・能力」が絵に描いた餅であつてはならない。各学校において、児童生徒の実態を各種調査や学校評価というエビデンスを分析し、全職員でスクールプランを作成していく中で、学校がチームとしてベクトルをそろえ邁進していくためのツールとして活用することが必須である。
 本校では、今年度職員の3分の2が入れ替わりとなつてゐることもあり、全職員でスクールプランに示されている内容を自分事に落とし込み、各自の実践につなげる状況づくりとして研修を設けた。

学校組織マネジメント研修の際に、児童生徒の

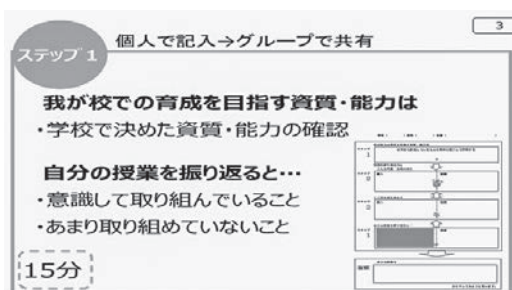


図5 我が校で育成を目指す資質・能力は

授業づくりをするうえで、授業者は、児童生徒が表出する言葉やその他の表現を価値づける、いわゆる教育的鑑識眼というアンテナが鋭敏で伸びていかなければならない。そのためには、一人一人が授業づくり、そして授業を開き、同僚にみてもらい、学級の子どもの姿を参観してもらうことで、同僚同士の教育的鑑識眼という見取りが確かなものとなつていく。授業づくり→授業公開→同僚同士のリフレクションを繰り返すことで、指導と評価の一体化につながるのである。

研修の企画・運営を校内研主任・学力向上推進主任というミドルリーダーに託すこと(図6)で、その立場の職能開発ともなる。そのため、

三 おわりに

学校長として、生き物である学校を俯瞰し、良



図6 ミドルリーダーによる研修

自分の日々の授業で、スクールプランにある本校の「育成を目指す資質・能力」を意識し、授業づくりをしていきたい。色々な先生方と対話すること、それを聞くことができて勉強になった。このような研修を継続し、組織としてベクトルを揃えていきたいと思つた。次の研修も楽しみ。

図7 研修後の降り返り

実態を踏まえ、組織としてチームとしてベクトルを揃え、ありがたい姿に向け、課題解決に取り組むことの意味や価値を確認したため、その取り組みとしてスクールプランに示されている内容を各自の実践に落とし込む研修である。

③ 我が校で育成を目指す資質・能力は

NTTS研修の「具体的な方策を考え組織的・協働的につなげる」研修プランを活用し、スクールプランに示されている「育成を目指す資質・能力」を各自の授業実践で落とし込み、育成が図れる醸成づくりとした。

学校三役とそれらのミドルリーダーで研修の意味や流れを確認し、研修当日を迎えた。
 研修当日、学校長としては、ミドルリーダーの進行・ワークショップ型の研修を見守り、教職員同士でそれぞれの思いを出し合う姿に、改めて託す価値を再確認できた。(図7)は、研修後の振り返りである。

新任校長としての抱負



学校の特色を強みとした 魅力ある学校づくり

「学校ブランドデザインの活用による共通理解を通して」

座間味村立慶留間小中学校 校長 大田 恵

一 はじめに



本校は、慶良間諸島にある慶留間島（座間味村）に所在し、大正四年に座間味村尋常小学校慶留間分校として設立されました。今年で創立百周年を迎える歴史ある学校です。

昭和二十年三月に米軍が慶良間諸島へ上陸し、沖縄の地上戦が始まりました。慶留間集落の小高く見晴らしのいい場所にある「小鳩の塔」は、戦時に命を落とした若い児童らを祀るために建てられています。

本校の校章は、そんな歴史の流れを受け、平和の願いを込めて「慶」の文字を囲むように鳩がカタどられています。二本のペンは勉強にいそむ心を表し、固く結びついている様子で固い団結を表しています。

立地としては、港のある阿嘉島から橋を渡り入島し、集落を抜けると学校が見えます。海岸に面して運動場と校舎があり、地域の協力により整備された運動場は、学校の誇りといえます。校舎二階からの眺めは、青い海と青い空、そして運動場の緑のコントラストが抜群で、最高のロケーションとなっています。

また、慶良間地域は多

島海景観だけでなく、透明度の高い優れた海域景観を有し、珊瑚礁に多様な珊瑚が生息するなどが高く評価され、平成二十六年三月に慶良間諸島国立公園として指定されました。ケラマジカやアカシヨウビン、ウミガメなどの生物は散歩中にしばしば出会えます。三月のシーズンには、校舎からクジラを見つれることもあり、子供たちや職員にとっても楽しみな時期でもあります。

四月には、慶留間区の公民館で新職員の歓迎会が開かれました。目の前の海で漁獲した新鮮な食材を使った美味しい手料理と、子供たちの出し物で温かいおもてなしを受けました。このような素晴らしい地域に赴任できたことを幸せに感じつつ、学校長として責任の重みを実感し身の引き締まる思いでした。



二 学校の概要

令和七年度の職員数は、管理職を含めて、小学部五名、中学部六名、座間味村会計年度任用職員二名の合計十三名で和気あいあいと業務にあたっています。児童生徒の在籍数は、小学部七名、中学部三名の合計十名で、そのうち、小学生高学年二名と中学生二名の計四名が留学生として親元を離れ、県外から移住し共同生活を送っています。

この留学制度は、国士舘大学教授が代表を務める一般社団法人との連携ですすめており、平成二十六年度から続いている本校の特色の一つにもなっています。

慶留間島の子供も留学生も、まるで兄弟のように仲が良く素直で明るい子供たちです。

また、保護者・地域の皆さんも学校の教育活動に大変協力的で、春の遠足や水泳学習、体験ダイビング、運動会など様々な学校行事で、多大な支援をいただいています。

三 教育目標と経営方針

（一）教育目標

「心豊かで、自ら学び、実践できるたくましい子の育成」とした知・徳・体の目標のもと、自然豊かな環境の中で、一人一人を大切にしたい教育活動は本校の魅力ともいえます。

（二）経営理念とめざす子供・教師・学校像

○（経営理念）子供たちが本校で学んで良かった、教職員が本校で勤務して良かったと実感できるよう、全職員が一つのチームとなり、共感と信頼、成長のある学校をめざします。

○（子供像）夢や希望をもち活動する子供

○（教師像）愛情を持ってかわる教師

○（学校像）学び合い、響き合う学校

児童生徒や家庭・地域・社会と共に考え、共に学び、共に育ちゆく、社会に開かれたカリキュラムマネジメントの展開と、教職員・児童生徒の三つの「きょうかん」のある学校づくりを経営理念として取り組んでいます。

【共感】共に同じことを感じ取る

【共汗】共に汗を流す

【共歓】共に歓びあえる

（三）経営方針

学校経営の理念に基づき、児童生徒に「学びの保障」を実現するために、次の三本柱を経営方針に立てて教育活動を推進しています。

○継続性を見通した小中連携の推進

○学びの質を高める

「主体的・対話的で深い学び」の実現

○環境を生かした、地域に根ざす教育の推進

この経営方針を視覚的に見やすくまとめ、共通実践の土台となっているのが、ブランドデザインとなっています。

継続性を見通した 小中連携の推進	学びの質を高める 「主体的・対話的で深い学び」の実現	環境を生かした 地域に根ざす教育の推進
学年学部の縦割り活動 少人数教育、個別支援 キャリア教育	PDCAサイクル経営 単元スパンの指導と評価 グルマッ子学習ステップ	地域協働参画の推進 平和教育、環境教育 （開かれた学校・学級）

教育活動推進の3本柱

した。

そこで、

年度初めに実施される校長講話を活用して、

学校全体で

共有する機会を設けま

した。子供

向けの講話

としつつ

も、意図的

に職員への

メッセージ

性を持たせ

た内容にし

ました。とくに教職員に向けては、「学校教育目

標と教育活動の関連を認識し、授業や体験活動に

取り組むことに大きな価値がある」という校長の

思いの発信にもなりました。

第一回の校長講話でブランドデザインを紹介すると同時に、活動風景の写真を配置し、主な教育

活動がどのように関連しているのかを、わかりやす

く説明しました。学校の大切な存在である子供

を軸とした講話に、どの子も興味津々の表情で、

参加していました。

さらに、講話で紹介するだけでは記憶が薄れて

しまうと思い、講話のスライドシートを印刷・ラ

ミネートし各教室に掲示しています。

講話の大きな狙いは教師の意識向上でもあり、

今後の学校生活の充実による魅力ある学校づくり

のスタートとも考えています。ブランドデザイン



を活用して、目的を明確にすることで自分たちの学びが学校教育目標の何とつながっているのかを子供、教師、保護者が理解する機会になることを期待しています。

四 おわりに

学校は子供、教職員、保護者・地域の三者が目標を共有し協働できる場所といえます。

子供たちには、学校生活全般を通して上級生がリードしつつ、幼い一年生の考えも大事にする支持的風土の醸成が重要となります。一人一人の心理的安全を保障し、子供にとって魅力ある学校をつくりたいと考えています。

教職員は、対話による信頼関係の構築と組織体制の向上を図ることが「働きやすさ・働きがい・心身の健康」につながると考えます。一人一人と対話し、安心して職務に専念できるように魅力ある学校づくりに取り組みます。

保護者・地域は、学校行事やPTA活動、学校評議員会等を通して、子供の成長の支援者という意識を共有することが大切です。互いを尊敬し、支え合える関係を構築することで魅力ある学校づくりの一步が踏み出せます。

社会の変化に柔軟に対応するために、日々の学校改善・授業改善と同時に、人と人のつながりこそ最大の魅力につながると考えます。

慶留間小中学校の特色を強みとして、一人一人を大切にしたい魅力ある学校づくりを推進するために、校長として、今後も学び続け、「心豊かで、自ら学び、実践できるたくましい子の育成」に向かい尽力していく所存です。

特色ある学校づくり



地域と共に未来を育む教育の推進

宮古島市立砂川小学校 校長 砂川 栄作

一、はじめに

本校は、宮古島市城辺地区の西側に位置し、今年九月には創立百十七周年を迎える伝統ある小学校です。現在の児童数は七十六名で、各学年一学級、特別支援学級二学級の小規模校です。校区内には、サトウキビを中心に葉タバコや施設園芸作物が広がり、のどかな農村風景が広がっています。近年では、風光明媚な「インギヤーマリンガーデン」が多くの観光客で賑わいを見せています。

また、県指定史跡の「上比屋山遺跡」や県指定有形民俗文化財の「友利あま井」といった貴重な文化遺産が点在し、各自治会ではクイチャーや獅子舞などの伝統芸能が大切に継承されています。

しかし、人口減少はこれらの伝統芸能の継承者不足という課題を招いています。

さらに、令和三年には隣接する中学校の統廃合により、これまで中学校が担っていた地域学習や伝統芸能の継承といった重要な役割を、小学校である本校が引き継ぐ必要性に迫られました。

このような背景から、本校では子どもたちの健全な成長と地域社会への貢献を一体と捉え、地域と共に未来を育む特色ある教育活動に取り組んでいます。

二、校内研究主題と設定理由

本校の校内研究主題は、「主体的・協働的に学び、ふるさとに誇りと愛着を持った人間性豊かな子どもの育成」とし、サブテーマを「家庭や地域と連携して豊かな心を育む教育活動の充実」としています。

予測困難な現代において、子どもたちには自らの人生を主体的に切り拓く力が強く求められています。社会に積極的に向き合い、関わり合う過程を通して、一人ひとりが自らの可能性を最大限に発揮し、より良い社会と幸せな人生を自ら創造していくことが重要です。

学校教育においては、キャリア教育の視点（「かわる力」「ふりかえる力」「やりぬく力」「みとおす力」）を積極的に取り入れ、地域の教育資源を最大限に活用した教育活動を展開することが不可欠です。これにより、子どもたちに目的意識を持たせ、社会的・職業的自立に必要なコミュニケーション能力や幅広い学力を確実に身につけさせることが求められます。

本研究では、地域背景と学校の現状を踏まえ、家庭や地域と密接に連携し、地域の教育資源を最大限に生かした教育活動の推進に取り組んでいます。これは、本校が目指す資質能力である「気づく力」「共に学ぶ力」「活用する力」の育成にも繋がるものと考えています。

三、地域の教育資源とその活用

本校が位置する城辺地区は、多様な教育資源に恵まれており、これらを最大限に活用した教育活動を展開しています。

【地域の教育資源と「綾道」の活用】

宮古島の言葉で「趣のある道」を意味する「綾道（あやんつ）」。宮古島市教育委員会が平成二十五年三月に発行した「綾道：砂川・友利コース」は、本校が位置する地域の貴重な教育資源がまとめられた、学習に最適な教材です。

総合的な学習の時間を活用して、「友利元島遺跡」、「友利のあま井」、「金志川泉」、「金志川豊見親屋敷跡遺跡」、「上比屋山遺跡」といった歴史的・文化的な遺跡や史跡等について、講師を招聘して学習を行っています。が、「綾道」には写真や図、豊富な資料を用いて、児童にも分かりやすく簡潔に解説されています。この「綾道：砂川・友利コース」は、地域学習の読み物資料として非常に有効であり、現地での見学と組み合わせることで、児童の理解をより一層深め、郷土への誇りを育むことが期待されています。

また、地域に継承されてきた「うるかクイチャー」、「友利クイチャー」、「獅子舞」といった伝統芸能についても紹介されており、その歴史や背景を知ることができます。



宮古島市教育委員会発行「綾道」

【他地域の教育資源の活用】

本校では、校区内の教材に留まらず、宮古島全体の多様な教育資源を積極的に学習に取り入れていきます。各学年での学習や学校全体での取り組みを通して、子ども達の学びを広げ、深化させることを目指しています。次に主な学習の場として、活用している教育資源を紹介します。

【宮古島市熱帯植物園】

多様な植物や昆虫が生息し、自然素材を活用した創作活動の場として、活用しています。

【宮古島市総合博物館】

昔の暮らし、年中行事、歴史、野鳥、生き物、自然といった幅広いテーマの学習拠点となります。

【地域の伝統文化・芸能保存会】

クイチャーや獅子舞などの伝統芸能の継承者である地域住民の方々から、直接指導を受け、文化の価値を肌で感じます。

【宮古島市伝統工芸品センター】

貢納布の製作過程や歴史的背景を学び、機織り体験を通じて先人の知恵と技術に触れることができます。

【地域の文化財・史跡】

人頭税や廃止運動に関連する場所を巡り、具体的な歴史の現場から地域の変遷を学びます。

【伊良部島・下地島、宮古島海中公園、インギヤーマリンガーデン、東平安名崎等】

宮古島ならではの豊かな自然環境を活かしたシュノーケリング、野鳥観察、水中観察、海岸植物の観察、地形学習などを通して、自然の多様性と重要性を学びます。

【地域人材】

地域づくり協議会・学校運営協議会の協力により、様々な場面で地域住民・関係機関の方々が持つ知識や経験、技能を教育に活かしています。

四、活動の充実を支援する推進事業

地域の教育資源を最大限に活用し、児童の人材育成を推進するための具体的な事業を計画・実施しています。

【城辺地区児童生徒人材育成事業の活用】

本事業は、児童が宮古島の良さを再発見し、ふるさとを誇りに思い、たくましく生き抜く人材へと成長することを目的とする教育委員会の事業です。生活科、社会科、理科、総合的な学習の時間といった多角的な視点から、地域の歴史、伝統工芸品、豊かな自然環境について、見学や体験活動を通して主体的に学びを深める事を趣旨として、交通費や講師謝礼等の経済的な支援を受けています。

【城辺地区地域づくり協議会との連携】

城辺地区の持続的発展に貢献するため、地域づくり協議会と連携し、様々な活動に積極的に取り組んでいます。

本校の総合的な学習活動の広報、環境美化、花と緑あふれる地域づくり、スポーツ振興、健康づくり、文化財保護、伝統芸能継承、新潟県上越市板倉区との交流事業等に積極的に参加することで、児童生徒の資質能力育成と地域発展に貢献しています。

【魅力ある学校づくり推進事業の活用】

地域の教育資源を最大限に活用し、児童にとって魅力的な学習環境を創出することを目的とする教育委員会の事業です。

見学に必要な大型バスを利用し、地域の自然、史跡、戦跡、施設の見学、伝統芸能に関する講話、そして様々な体験活動を実施しています。地域の有形無形のエデュケーション資源を積極的に活用し、地域学習を一層深化させていきます。



「上比屋山遺跡見学」

五、成果と課題

各種事業を活用した取り組みを通じて、児童は施設や戦跡・史跡を実際に訪れ、関係者から直接話を聞き、体験することで、物事の見方や考え方がより一層深まっています。これにより、新たな疑問や探究課題が生まれ、児童の住む地域への興味関心が高まり、結果として郷土愛の育成に繋がっています。さらに、本校が育成を目指す資質能力である、「気づく力」、「共に学ぶ力」、「活用する力」の育成にも大きく貢献しています。

これらの活動により、「主体的・協働的に学び、ふるさとに誇りと愛着を持った人間性豊かな子どもの育成」という研究主題の達成に向け、着実に成果を上げています。

一方で、地域における伝統芸能の継承者が減少しているため、今後の活動において、どのように児童が深く関わり、継承への意識を高めていくかを検討する必要があります。これらの取り組みを小学校のカリキュラムにいかにつ実に組み込み、継続性のある学習として展開していくかが課題です。地域との連携をさらに強化し、統合新設された他地区にある中学校とも共有した取り組みが求められます。



伝統芸能獅子舞の披露

六、終わりに

この実践が、本校そして、城辺地区の子どもたちの未来を拓き、地域社会の持続的な発展に貢献できるよう、私たちはこれからも「地域との連携強化」と豊かな心を育む教育の推進、「伝統と文化の継承と発展を通して人材育成」、「教育活動の深化と継続性」に力を入れていきます。

特色ある学校づくり



海洋教育を主軸とした ダイナミックな教育活動

竹富町立竹富小中学校 校長 岡崎 心

一 はじめに

竹富島は石垣島の南西約六kmの海上に盆を伏せたように浮かぶ周囲約九kmの隆起珊瑚礁からなる人口三四〇名余の島である。東(アイヌタ)、西(インヌタ)、仲筋(ナージ) 三つの集落からなり集落全体が木造赤瓦の民家と白砂が敷かれた道という沖縄古来の姿を保っている。一九八七年に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、年間六〇万人余が観光に訪れる。

年間多くの地域行事があり、とくに国指定の重要無形民俗文化財の種子取祭は島の最大行事であり、郡内外から関係者や観光客など多数の人々が訪れ祭祀と舞台奉納が繰り広げられる。その他にも国、県、町の指定文化財は二九を数え、まさに伝統文化の宝庫である。

竹富島には五〇〇年前の島の偉人、西塘の遺訓「かくしさや うつぐみどう まさる」(皆で協力することこそ優れて美しいことである)があり、島人はその「うつぐみ」の精神で自助・協力し生活を支え



合いながら伝統文化を継承している。

本校は三つの集落の中央に位置し、今年度、小学校創立一三三年、中学校は七五年目を迎え、これまで輩出した卒業生は二五〇〇余名を数える。島には高等学校がなく、中学校卒業後はほぼ全員が親元を離れ島から巣立っていく。島立ち後は、多様な人間関係の中で協働しながら自立・自律し自己実現を図らなければならない。そのためにも、主体的に学び、創造性豊かでたくましい実践力のある児童生徒の育成に力を入れている。

二 竹富町の海洋教育について

竹富町には、小中併置校七校、小学校三校、中学校二校が設置されている。各島それぞれ地域行事が盛んで学校と地域との関わりも密接である。また、竹富町は令和元年度から町内の全学校において海洋教育を推進しており、その取組においても地域社会との関わりによるものが大きい。町民は、海洋から多大な恩恵を受けるとともに、海洋環境に少なからぬ影響を与えており、海洋と人類の共生は重要課題である。海洋教育は、海洋と人間の関係について理解を深めるとともに、海洋環境の保全を図りつつ国際的な理解に立った平和的

かつ持続可能な海洋との関わりを可能とする知識、技能、思考力、判断力、表現力を有する人材の育成を目指している。竹富町の海洋教育では、海に親しみ、海を知り、海を守り、海を活用するの四つの視点を基本とした学習を通して、海の自然や文化と人との共生に向けた人材育成を目指している。

三 本校の海洋教育について

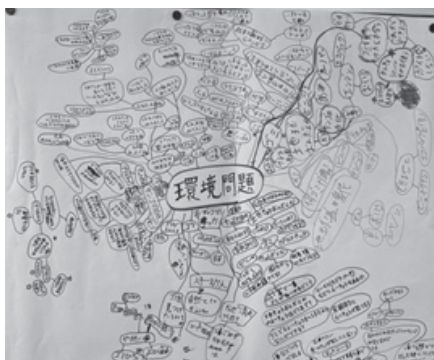
(一) 教科横断的な教育課程の編成

本校の特色である海洋教育について、主に総合的な学習を軸として道徳、特活、各教科を関連づけた教育課程を編成している。各教科間の関連をおさえて指導できるよう各学年で教科横断的なカリキュラムの年間指導計画を作成し実践している。適宜振り返りを行うことで課題を明確にし、教育課程の改善を行っている。

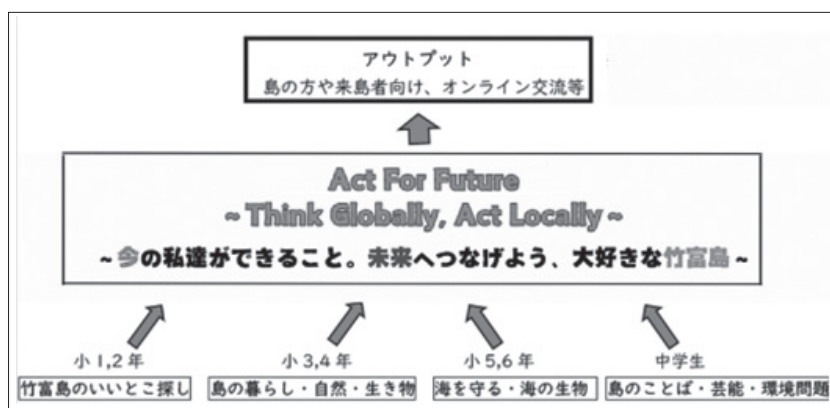
学年	1	2	3	4	5	6
道徳	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生
国語	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生
算数・数学	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生
理科	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生
社会	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生
総合的な学習の時間	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生
体育	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生
音楽	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生
美術	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生
外国語	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生	海洋と人類の共生

(二) 地域人材、地域素材を活かした授業

○海洋教育(総合的な学習)の進め方
総合的な学習の時間(海洋教育)において、令和六年度本校は、「Act for Future」の私たちができること。未来へつなげよう、大好きな竹富島」をテーマに大好きな竹富島の未来を考え、持続可能なまちづくりを行うために、現在の私たちの取り組みや小さな一歩を未来へつなげていくという課題を設定した。「テーマ設定」「情報の収集」「資料の比較・整理」「発表」の学習過程を小中共通実践し、個人で問いを持ち課題解決に向けて取り組んだ。海洋教育教科横断的なカリキュ



テーマ設定に向けたマインドマップ



歴史民俗資料館 喜宝院菟集館見学



地域の方へのインタビュー



シュノーケリングでサンゴ観察



海洋教育サポーターによる講話

ラムに則り、各教科で培った資質が活かされるよう留意している。「情報の収集」では、地域の伝統行事等がテーマの場合、書籍やインターネットでは調べられない内容が多い。そのため、地域に精通した方を「海洋教育サポーター」に委嘱し、今年度のテーマに沿った講話や、個々の問い（課題）を解決する過程でアドバイスを頂いている。問い（課題）を解決する過程で、インターネットや本では求めている必要な情報が得られないことが多く、地域の方にインタビューをしたり、施設

四 おわりに
十五の春を迎えたと子ども達は島を離れる。変化の激しい時代に対応できる生きる力を育むと共に、生まれ育った島の歴史や文化に誇りを持たせ、人間としての根っこをしっかりと育みたい。今後も地球規模で考え、足元から行動できる子ども達の育成に全職員協働して取り組んでいく。



アーサ採り



もずく採り



ビーチクリーン

見学や体験活動をしたりしながら個人テーマの課題解決に取り組んだ。
発表の過程では、竹富島のことをもつと多くの方々に知ってほしいという児童生徒の願いを受け、地の利を活かし港待合所にて、観光客を対象に竹富島の自然や文化、ゴミ問題等まとめたものを発表した。Googleformで感想を蒐集したところ日本各地の方から好意的な回答を得られ、児童生徒の自己肯定感が高まった。
その他にももずく採りやアーサ採り、ビーチクリーンなどを行っている。



観光客に向け港で発表

校長講話



共有し「対話する」校長講話 「子どもに力をつける」ために

東村立有銘小学校 校長 前川 恒久

一 はじめに

本校は、沖縄県国頭郡東村に所在しています。東村は、いわゆる「やんばる」と呼ばれる地の東海岸に位置しています。亜熱帯性の自然林に覆われた緑の樹海には、絶滅が危惧されている鳥類のノグチゲラやヤンバルクイナ、昆虫のヤンバルテナゴコガネなどの貴重な野生生物が生息しています。

本校の裏山は、ウガン（卸神）ともウタキ（卸獄）とも呼ばれ、白い樹肌をした「オガタマ」の原木が有り、地域の人たちによつて大事に守られています。さらに、学校から約三キロメートルの距離にある慶佐次川（げさしがわ）には沖縄本島最大のマングローブ林が形成されています。ここに生息するヒルギは、オヒルギ・メヒルギ・ヤエヤマヒルギで、特にヤエヤマヒルギはその北限とされており、国の天然記念物に指定されています。地域は農産業が多く、主にパインアップル・マンゴー・タンカン・カボチャ・サトウキビ等の栽培が盛んです。近年は、エコツーリズムに関わる仕事に携わっている方も多くいます。このような豊かな自然と地域に包まれた本校は東村内に三つある小学校の一つで、在籍児童二十六名、三つの複式学級からなる小規模校です。村立幼稚園（園児二名）も同一校舎内に併設され、幅広い年齢層の子ども達が学ぶ学校です。

「アルメンジャー」という愛称で呼ばれる本校の子どもたちの活動の合い言葉は、「笑顔、チャレンジ、仲間とともに」であり、教育目標である、「進んで学ぶ子」「思いやりのある子」「健康で粘り強くやりぬく子」の具現化を目指しています。

二 私の考える校長講話とその対象

私の目指している校長講話は、私の考えを聞き手に伝えつつ、相手にも考えてもらい、「対話する」場となることです。私は自分の考えを相手に伝えることが楽しいです。しかし、一方的に伝えるだけでは、聞き手に深く考えてもらうことができません。

あえて、聞き手、相手と記しました。広義で捉えるなら、聞き手、相手は、四つあります。①子ども②職員 ③保護者 ④地域 の四者です。

三 講話の際にこころがけていること

私の学校経営方針の要は「子どもに力をつける」です。どの対象の講話においても、その要に繋がる内容としています。一口に力と言ってもその形は様々です。数値化しやすい認知能力、それに対して数値化しづらい非認知能力、いずれの力についても、対象となる聞き手、相手に応じて分かりやすい言葉で私の考えを伝えるよう工夫しています。また、講

話の際には、可能なかぎり視覚に訴えられるようにプレゼンテーションソフトを活用したり、具体的な事物・現象を準備したりします。

四 対象ごとの工夫と事例

① 対象が子どもの場合

年間計画では、朝の集会に四回の校長講話が計画されています。その他、儀式的行事においても、校長先生のお話として講話の機会が数回あります。朝の集会の講話では、

十五分の持ち時間があります。純粹にお話の場合もあります。一昨年度から定番となり、子ども達が楽しみにしてくれている「サイエンスショー」を行います。これは、米村でんじろう氏のような科学実験です。目の前で起こる不思議な科学現象に子ども達は興味津々で、全員が集中し、「うお」「すごい」という驚嘆の声とともに、「なんでかあー?」「どうして、そうなるの?」という疑問の声が毎回上がります。疑問の声があがるのは想定していますので、あとは、その疑問の声を拾い、考えを話してもらいます。でも、その疑問を私がすぐに解決・解説することはしません。その考えを他の子に検証してもらったり、反例をぶつけてみたりします。最近では、私が介入しないと止まらないくらいに現象に対する考えをアウトプットしてくれ



サイエンスショーの様子

ます。本校は前述のとおり、規模の小さな学校であるため、現象を手品のように不可解なことで捉えるだけの子どもいます。しかし、最近では、小さな子にも分かりやすいように説明してくれる子どもも出てきました。相手の状況（発達段階等）に応じて説明で

きる、説明しようとする姿は、「子どもが力をつけている」過程だと捉えています。この講話（サイエンスショー）では、共有した現象に対する自分の考えを他者（校長や仲間）に伝える力をつけるきっかけになることを狙っています。私も子ども達も楽しみながら、対話しています。朝に実施したことに對して、放課後や翌日に、自分の考えを伝えるくる子どもいます。きつと時間をかけて、考えてきたのだと思うと、うれしい限りです。

先述した「お話」の場合では、メラビアンの法則や人間の五感による知覚の割合等を踏まえて、言語情報、視覚情報、聴覚情報を工夫して、講話にストーリーを持たせるようにしています。本校の子ども達は幼稚園児（五歳児）から小学校六年生（十二歳）までの幅があります。いずれかの学齢の子どもに焦点をあてて「語る」つまり、言語情報と聴覚情報の伝達だけでは、低学年には言葉が難しく伝わらなかったり、逆に易しすぎると高学年には分かりきったことで退屈したりと、うまく伝わりません。ですから、伝える内容をプレゼンテーションソフトで表示（視覚情報）し、それをもとに「対話」することにしていきます。視覚情報として、低学年にも理解しやすいイラストや言葉を表示し、対話する内容（聴覚情報）はやや高学年より話します。私はPrezi（プレジ）というプレゼンテーションツールを使います。これは、スライド型のプレゼンテーションソフトに比べ、深度のあるプレゼンテーションを行うことができます。QRコードを参照していただける幸いです。具体的な事例として「ことばには力がある」という講話を紹介



講話（お話）の様子

紹介します。言葉も力も目に見えないものです。低学年の発達段階では、自らの発した言葉による他者への影響を考え、推察しづらいので、変化する事例をイラストで表示します。これが視覚情報です。そのイラスト表示している際には、「物の形が変わるように、人との関わりも変化する。ふわふわ言葉は相手を幸せにし、チクチク言葉で相手を傷つける。」とやや高学年向きの内容を話します。これは言語情報と聴覚情報です。低学年にとつては、やや難しい言葉（言語情報と聴覚情報）であっても、イラスト（視覚情報）がそれを補完します。高学年にとつては、より深く考えるきっかけになります。この場合でも、子どもたちに問いかけたり、子どもたちの考えを拾ったりして対話を楽しみます。小さな学校の大きな利点です。



講話に用いたプレゼンテーション

② 対象が職員の場合

職員に考えを伝える機会も校長講話としてとらえます。年度の当初の学校経営方針をはじめとして、職員会議や校内研修、職員集会等、時間の長短はあれども、機会は多くあります。その際に心掛けていることは、学校経営方針に関わる一貫性です。以前話した内容と整合しない内容を話しては、職員も困惑します。ですから、伝える内容は本校独自のグラフィックデザインオーガナイザー（以下GDO）と整合がとれるように話します。このGDOには、学校教育目標と目指す子ども像、学校経営方針、自立した学習者の育成等と本校の教育活動との関わりを図式化して表示しており、年度当初に全職員に配布しています（下記QRコード参照）。職員には、それぞれの働きぶりを肯定的にふり返り、次の指導に

生かすための講話となることをこころがけています。

③ 対象が保護者の場合

本校の教育活動について、学校だより以外で保護者と対話する場面があります。PTA総会や地域懇談会とは別に、毎月の授業参観時に、「ぱくぱくタイム」と称して、参観者とお茶会の場を設けています。直近の教育活動の意図を保護者に伝えたり、行事後の子どもの様子をうかがったりします。最近では、一人一台端末での子どもたちの学びやその効果について説明しました。家庭でのICT機器の使い方や情報モラル、特殊詐欺に関する情報交換等を活発に行うことができました。保護者の考えや困り感を共有することができ、良い対話の場となりました。また、昨今の教職員の働き方改革についても、理解を求める講話も行いましたが、保護者も前向きに聴いていただけたと感じています。



有銘小 GDO

④ 対象が地域の場合

小さな地域であるが故に、地域が学校に寄せる関心も大きいです。学校が地域とともにどんな子どもを育てたいのか、学校では何を目標として教育活動を行っているのかを地域懇談会で説明しました。多くの質問もあり、地域の方のお知恵をいただく機会となりました。



地域懇談会説明資料

五 おわりに

小さな地域の小さな学校の利点を生かした、共有し「対話する」校長講話を今後も楽しんでいきたいと考えています。

校長講話



創立三十周年 地域から応援される 学校をめざして Move 沖縄東中

沖縄市立沖縄東中学校 校長 宮城 秀輝

一 学校紹介



沖縄東中学校は、平成八年に創立され、今年で三十周年を迎えました。地理的には沖縄市の東側に位置し、朝は中城湾のガラガラとした海面が望め、勝連城趾、津嘉山森、高原の丘が見え、風光明媚な自然と景観の中に建つ学校である。

学校区は泡瀬地区、古謝区、桃原区、海邦町で構成され、「沖縄市」の有名民俗文化財の泡瀬京太郎、古謝獅子舞、泡瀬区エイサー等、継承されている地域です。

現在、全校生徒七一五名名、教職員五九名、普通学級二クラス、特別支援学級五クラスです。部活動は男女ハンドボールや男女テニスが優勝旗

を持つて帰る元気のある学校です。生徒は、全体的に人懐っこく素直さが見られます。

しかし、自分自身の能力がしっかり備わってきただのに、それらを発揮させきれずにいる生徒も多く見られます。学力においても、「二極化」しており、国や県の示す「自学自習力」「個別最適な学び」には、まだまだ届かない状況で、今年度はICT機器を効率よく活用した授業改善を中心に取り組んでいます。

二 校長講話について

私の考えている「校長講話」は、生徒に自信を持たせること。生徒を誉めていくこと。生徒の将来に役立つ内容にすること。常にキャリア教育の視点をもって臨んできました。前任校（読谷村立古堅中）でも、教育目標の確認、教職員は生徒達のサポーター、生徒達へできている承認活動、夢

の見方等、実施してきました。現任校でも同じ信念をもって、画像をつくり、飽きのこない、生徒が理解しやすいようにわかりやすい言葉で伝えています。

三 赴任校最初の「校長講話」

本校の学校キャッチフレーズである「Move 沖縄」スポーツ熱中、勉強集中、みんな夢中の沖縄東中！その大きな表示が正門横に掲げられています。今年度は創立三十周年ということもあって、沖縄東中を卒業した先輩方が、創作し誇りある学風をこの「Move 沖縄」を七一五名一人一人が意識を高めて、しっかりとやっていきましょう。そして、これまで頑張ってきたことを振り返りながら、



キャリア教育の視点を取り入れて、日常的に中学校では、このような活動でどんな能力や力を身につけているか提示しました。例えば、読書で視野や知識・感性を豊かにする（生きる知恵）、日々の読書からは、知識も考



今年度 めざすところは 地域から応援される 沖縄東中学校

たい。この沖縄東中は、三十二年間生徒の活躍ももちろんですが、地域からも温かく見守られてきました。これからもそれを継続していけたらいいなと思います。中学校の三年間で、義務教育が修了し、高校大学と進んで大人になって

日常的頑張っている 自主につながっている活動

☆普段の学習(授業)で知識を広げる = 生き方の広がり
☆「MOVE沖縄東中」7つの習慣をしっかりと守る「じりつ(自主)」
☆自分で考えて家庭学習ができる「自学自習力」「探求力」
☆各種検定や昇段試験等に挑戦する(チャレンジ精神)
☆読書で視野や知識・感性を豊かにする(生きる知恵)
☆情報機器が使える、調べ学習で情報力アップ
☆知識や常識、情報を豊富にして、判断できる能力を身につく
☆自分の生き方について、悩んで相談できる自分がいる
☆自分の行動で失敗があったけど、反省して正しく行動できる
……etc

え方など色々な知識が得られます。それらが将来の自分の生き方につながっていくんだよ。その他にも、みんながこれまで取り組んでいることは、決して無駄ではないんだよ。これからも頑

泡瀬自治会は沖縄東中学校
30周年に向けて
花の苗を1000鉢
寄贈準備をしています。



いきます。いずれは、地域に住む仲間として協力して、地域を盛り上げたり、見守ってほしいと願っています。地域から応援されると、皆さんも自分の住んでいる

地域に愛着が増していき、平和で安心な地域になると思いませんか。そうするためには、生徒みんなが「MOVE沖縄東」に取り組んで、学校も地域も元気になっていくように思います。

現在も学校以外で地域のボランティアを頑張っている生徒がいます。公民館長さんとお話している機会があつて、「沖縄東中の生徒と一緒に苗植えを手伝ってくれました。元気もよく大変助かりました」。校長先生も気持ちのいい感謝のことばをいただきました。今年度は「ボランティアカード」も実施していきます。皆さんが地域で活動することを学校でも認めています。継続的なボランティアは地域貢献・社会参加になっています。そんな活動を多くの生徒が頑張ること、地域から応援される学校」になっていきます。

援される学校」になっていきます。

四 校長講話の感想

◎自分達が当たり前のようにやっていることが、人のためになっていることに気づきました。
◎地域の人達と関わりを持つことは、自分の命や周りの命を大切にすることと深く関係していることがわかりました。
◎周りの人達のおかげで、勉強ができて、友達ができ、とてもいい環境で過ごしていることに改めて気づきました。
◎私を支えている人のように、自分も誰かを支えられるような人になりたい。

五 おわりに

中学校期の多感な時期の集団が、3年間で集団意識を持つことを学ぶ機会に方向性を示して導いていくことは、共生社会に糧になると信じ、常に前を向いていきたいと思っています。学校は社会の縮図であると言われます。我々教職員が一つになって、教育実践にとりくんでいきたいと思



おおきな志をもち
きもちをひとつにして
なににも挑戦し
わをつつていこう！
ひとりひとりが自分を磨き
がんばる人を応援して
しょうらいを想い 楽しんでいこう！

在外日本人学校便り



財務感覚を持ち、日本国の各機関、 上海日本商工クラブと密接に連携

上海日本人学校虹橋校 校長 當 間 朝 成

一 中国上海は、魅力的な大都会スマート シティー

中国上海に赴任して、二年目を迎えた。私の中国に対するイメージは、大都会上海の快適な暮らしにより、一新した。中国では、現金支払いがないので、財布を持つ人はいない。公共交通機関、コンビニ、デパート、飲食店も全てがスマホQR決済で完結する。また、デリバリーも全ての商品（例：スターバックス、ケンタッキ、マクドナルド、日系スーパー）が自宅に居ながら安価で注文でき、すぐに自宅に届けられる。地下鉄（安価で四十円〜百四十円程度は、縦横無尽に上海市内に張り巡らされており、街には、超高層ビル群がどこまでも建ち並び、デパート内では、西欧有名ブランドのファッション、装飾品、化粧品店等が軒を並べている。そんな素敵な上海が今では、すっかり私のお気に入りの街になった。



二 私立学校の性格を持つ上海日本人学校

上海日本人学校は、虹橋（ホンチャオ）小学部のみ、浦東（プードン）小中学部、高等部の三校からなる。三校合計の児童生徒数は、約千八百

人で、虹橋と浦東の二つのキャンパスがある。虹橋校は、今年度三十九年目を迎え、児童数九百八十六人、教職員九十二名、通常学級四十、特別支援学級三、計四十三学級であり、中国国内最大規模の学校である。児童のほとんどは日系大手企業や外務省職員のご子息であり、中国語を話すことのできる児童（国際家庭）は、20%程度である。上海日本商工クラブが学校の設置者であり、授業料を徴収する私立学校の性格を有している。また、教員は、文部科学省派遣教員三十二名、学校採用教員三十三名と約50%の構成比である。本校には、教育委員会が存在せず、上海総領事館の指導を受け、事務局、運営委員会を中心に管理運営を行っている。運営委員会（月一回開催）の構成メンバーは、上海総領事館（外務省、文部科学省職員）、上海日本商工クラブ（電気部会、建設、建材部会、金融・保険部会等）、監事、事務局、三校PTA会長、三校校長が出席し、学校の財務、学校採用教職員の待遇、福利厚生、入学許可、学校行事報告等が議題となり、審議・決議されている。日本国内では、学校の財務や教職員の処遇等について校長が



議論に参加することはほとんどなく、教育委員会管轄の決定事項であった。本校では、そのような事項に対して、校長として意見を求められることもある。個人的には、琉球銀行に八年間勤務した経験があるので、その経験が役立っている。

三 校長の業務

三校校長と事務局で学務会議を毎月開催し、学校行事、教員管理等について情報を共有している。学務会議では、一週間後に開催される学校運営委員会で提案される事項についての審議が行われる。また、三校の入学式、卒業式、運動会等では、来賓として参加し、児童生徒の活躍にエールを送っている。

研修としては、中国地区日本人学校校長研究協議会（昨年度香港、今年度天津開催 帯同者研修会も同時開催）及び東アジア・大洋州日本人学校校長研究協議会（オンライン）が毎年開催され、各校の課題や成果を共有し、問題解決に取り組んでいる。外務省管轄校もあれば、本校のように私立学校の性格を持つ学校もあり、各校が違った視点から意見を交流させることもできるとても良い機会となっている。それらの研修会では、外務省、文部科学省職員及び一般社団法人全海研の方の講演や助言を受けている。



また、日本と同様に定期報告書（教職員評価）があり、文部科学省派遣教員（文部科学省報告対象）及び学校採用教員（文部科学省報告対象外）の面談時に学習指導、校務分掌、研究等の指導、助言を行っている。

校長の重要な業務の一つとして、教員採用があ

る。前述の教職員評価面談（五月頃）までに来年度の任期希望の有無を確認し、公益財団法人海外子女教育振興財団の日本人学校等学校採用教員雇用支援プログラム（年一回開催）次年度から廃止に参加申し込みを行い、教員募集を開始する。財団指定の期日に面接を実施し、採用決定後、本人に通知する。教員需給が不足した場合は、本校ホームページで独自に募集を呼びかけ、人材確保を行っている。多くの方に応募していただくためにホームページで学校の様子や採用に関する情報を発信して人材確保に努めている。

四 教師の様子

全国の都道府県から文部科学省派遣教員と学校採用教員が年齢、所持教員免許種類、経験年数が多種多様な方が六十五名勤務している。校長として、各教師の特性を活かした適材適所の校内人事に努めている。自分の教育観だけに囚われるのではなく、相互に認め、尊重し合うように教師に助言をしている。

また、校内研究が活発に行われており、昨年度は、教科を絞らずに話し合い活動を中心に研究し、成果が見られた。お互いの授業実践やアイデアを校内研究広報誌（Gather チャオッター）で発表して、共有できた。今年度は、児童の体力不足が課題（怪我や骨折が多い）であり、「体育科」の研究を行っている。外国では、体育以外の時間に自ら運動をする機会が少なく、体育の器械運動で受け身の姿勢が取れず、怪我に至るケースが見られる。対策として、体育主任を中心とした体育部が空き時間を利用して、教師の必要に応じて体育の授業応援を行っており、好評である。

在外教育施設では、教師同士の生活の距離が比較的に近く、親和的な雰囲気にもなれば、ストレスと感ずることもある。管理職として、教師の心

身状態を把握し、早期対応を心がけている。

五 異文化体験と中国現地校交流

中国文化を体験する活動を授業に取り入れている。全学年で中国語授業（ネイティブ中国人教師）を週一時間実施している。家庭で中国語を利用している国際家庭もあり、中国語能力に個人差があるため、習熟別に三クラス編成とし、中国語を学習している。英語学習も全学年で実施しており、英語専科とネイティブ英語教師のティームティーチングで実施している。

異文化体験として、PTA主催の「チャレンジタイム」が全学年で実施されている。PTAの方が中国雑技団、変面、花文字、カンフーのプロと直接交渉し、学校にお招きして開催している。児童は、中国文化をプロの方から直接指導を受け、実体験できる良い機会となっている。



全学年で中国現地校交流を行っている。校長は、現地校に赴き、校長同士の情報交換、学校案内をしている。中国現地校の各教科の授業参観、学校運営について情報交換をすることができた。児童は、中国語の合唱や両国の伝統文化であるダンスや演舞を披露し、中国伝統の変面作成を行う等、交流を深めることができた。低学年では、名刺交換やゲームを通して、触れ合うことができた。



六 在外教育施設で働く魅力

在外教育施設派遣は、外国に長期間生活した経験もなかった私にとって、初めての経験である。

当初は、中国という外国で生活することの不安が多く、帯同予定の妻の安全が心配だった。勤務校は、大規模校であり、教育委員会の支えがないことも不安であった。しかし、実際に中国上海に赴任して、事前に抱いていた様々な不安は全くの杞憂だった。街は、整然としており、とても近代的で、治安も問題なく感じられる。帯同の妻も上海生活に大満足しており、大人になった息子と娘も上海に個人的に五回来るほどのお気に入りである。

日本国内における中国に対する報道と現実の生活には相違点があると個人的に感じた。中国人は、日本人に対して、親しく接してくれる。児童も現地校交流で将来の両国の架け橋として、親和的な交流を続けている姿が見られる。しかし、昨年度発生した日本人学校における殺傷事件は、痛ましい事件であり、学校の安全対策を強化する必要性を強く感じていることは事実である。海外で生活をするということは、いつでも危険と隣り合わせであることを再認識し、与えられた環境に感謝したい。現地で生活する日本の子どもたちの教育に携わることのできる在外教育施設は、教師にとって必ずプラスになる経験だと確信している。

七 おわりに

校長として在外教育施設に応募することは、生活環境が一変する選択肢であり、ハードルが高いと感じられるかもしれない。しかし、私は、中国上海に赴任してから、毎朝、目覚める度に外国で生活していることにワクワクしている。今日も日本では感じることでないこの外国の地で生活をし、異文化を体験する児童を育成することができ。そんな体験を皆さんと共有できたら幸いだと思う。

上海日本人学校虹橋校ホームページ



沖縄県小・中学校長会会報第88号

発行者 沖縄県小・中学校長会

住 所 那覇市松尾1-6-1 (沖縄県教職員共済会館八汐荘3F)

電話 098-943-9747 FAX 098-943-9748

E-mail: oki-koutyukai2@kca.biglobe.ne.jp (事務局長)

oki-koutyukai1@kpe.biglobe.ne.jp (事務局員)

印 刷 株式会社 国 際 印 刷

電話 098-857-3385 FAX 098-857-3892

E-mail: kokusai@herb.ocn.ne.jp
